

二つの光―農民文学と長田洋一さん

カルチャー文章講座講師 三島 利徳

2025年5月11日、私は長野県塩尻市立図書館「信州しおじり本の寺子屋」で講演させていただいた。演題は「農民文学と私―編集長7年を終えて」。私の講演は、安曇野市在住で「本の寺子屋」生みの親と言える長田洋一さんの配慮もあつて実現した。

講演では私がなぜ農民文学にひかれているかを話した。「かえりなん いざ／田園 まさにあれんとす なんぞ かえらざる」。5世紀初頭に作られた中国・陶淵明の「帰去来の辞」を読み上げた。ふるさとの田畑が荒れようとしている。帰らずにいられない―との気持ちに深く共感しているからだ。

私は県内下伊那郡豊丘村の山間地で育った。そのスライドを見てもらう。長野市に定住したので「帰去来」の実現は難しい。無人の生家が草木に埋もれないよう手入れに通い、地域の人たちとの交流を深めている。

農民文学を深く知るようになったのは新聞社の文化部デスクになってからだ。農業、農民、農村の現実と歴史、ふるさとへの思いなどがしつかりと描かれている数々の作品に出合った。現在と未来に向けて一つの光を得た感じだった。それをもっと広げたい。農民文学の書き手の皆さんに新聞に寄稿して頂いた。そのお名前を講演会でも披露。一ノ瀬綾（旧武石村出身）北原文雄（兵庫県）小林英文（佐久市）山崎人功

（安曇野市）武田雄一郎（長野市）小田切芳郎（飯山市）中沢正弘（長野市）佐藤藤三郎（山形県）草野比佐男（福島県）水野昭義（松川町）飯島勝彦（佐久市）小林ぎん子（上田市）―の諸氏などだ。

講演会場では、この方々の本の表紙もスライドで見えていただいた。

文化部から論説委員に移ってから、社説や一面のコラム「斜面」に、農民文学のことを積極的に書いた。

日本農民文学会は毎年「農民文学賞」を募集し、受賞作を「農民文学」に掲載している。新聞社の勤務を終えた私は農民文学者の研究を始め、この文学賞に応募した。評論「破天荒作家山田多賀市と農民文学」が2016年の第59回農民文学賞に選ばれ、同年4月の312号に掲載された。

山田多賀市（たかいち・1907～1990年）は安曇野市出身。山梨県で活躍した。

私は受賞作をもとにして『安曇野を去った男ある農民文学者の人生』（人文書館、2016年）を出版することができた。

山田は小作農を救うため農民組合運動に参加し、弾圧を受けた。作家本庄陸男と知り合い、作家への道を歩む。死亡届を偽造して兵役を逃れた。戦後は甲府版「農民文学」を創刊し9号まで出した。

雑誌に多くの作品を発表。「耕土」「雑草」「農民」「実録小説・北富士物語」「終焉の記」が単行本となっている。

私は受賞後2017年からまる7年間「農民文学」編集長を務めた。その間に出したのは計21冊。激務だったが、農民文学の元氣回復にため奮闘したつもりだ。

講演では農業や自然環境、共助の精神に目を向けることの大切さを訴え、農民文学もその一翼を担いたいとして、締めくくった。

長田洋一さんは河出書房新社の「文藝」編集長を務めた方だ。塩尻市立図書館が2012年に始めた連続講座「信州しおじり本の寺子屋」を立案した。文化人との幅広い人脈をもとに、講師人選にも関わった。

私は新聞社勤務の時から親しくしていた。退職後の2016年、本の寺子屋講演会で「本の魅力―書評の功罪」と題して話す機会を与えられた。私は体験を踏まえて、新聞の書評は権威や上滑り人氣に流されず、小さな声（出版）でもきらりと光るものを読者に薦めることの大切さを強調した。

本の寺子屋での講演という形で、私は長田さんからもう一つの光をもらった。2025年の講演が決まった時、長田さんから頂いた手紙も輝いて見えた。農民文学という光と合わせて演題は「農民文学と私」とした。

長田さんは私の講演に先立ち、体の不調を押して堂々と演説してくださいました。本の寺子屋に対する信念と氣迫を感じた。

それなのに、ああ、何と悲しいことか。長田さんは8月27日に逝去されてしまった。

10月、カルチャー文章講座のテーマを「編集者長田洋一さんと本の寺子屋」とした。私の知る限りの出版活動を話した。

俵万智さんの『サラダ記念日』を出版、俵さんは一躍有名に。『松下竜一 その仕事』全集、立松和平『遠雷 四部作』、齋藤史さんの小説『過ぎて行く秋』、信濃毎日新聞社編『漂流家族』などだ。

農民文学の心や、長田さんの編集と図書館への熱い思いを伝え続けたい。